

亡き人のお声を聞いて…

以前、妻と近くのイオンモールへお昼を食べに行った時のこと。妻がそのなかにある旅行代理店の店先に置いてあるパンフレットをたくさん貰っていました。それも温泉旅関係のものばかりです。後で事情を聞くと、境内の墓地の無縁佛さんたちにその「パンフレット」をお供えするためだそうです。

私のお寺の境内墓地には、江戸時代頃の多数の無縁佛があり、その石塔を一か所に集めてお祀りしています。そのすぐ横をJR東海道線が走っています。通勤電車の他に、北陸金沢行き「しらさぎ」や、飛騨高山行き「ひだ」、信州長野行「しなの」等の特急列車が一日に何本も走っています。今朝、その無縁佛さんが呟いたそうです。「横を走る特急列車の中で、温泉場へ行く人たちがとても楽しそうで羨ましい…。それを妻が聞き、パンフレットをたくさんお供えしたそうです。無縁さんたちは、たいへんお喜びになったそうです。

妻は早朝から2時間程、境内にお祀りしてあるご神佛等に掃除をしながら耳を傾けているようです。この日の妻は、その無縁佛さんとたまたま「波長」が合い無縁佛さんの切なる思いを受け止めたのでしょうか。このような「直観」と言いますか、受け止めて感じる「力」は私より妻の方が断然あります。ですから、お寺で行事をする前など妻の意見を聞きますし、終了後は感想を必ず尋ねます。

檀家さん等のお葬式が終わって、初めてご家族を亡くされた方が「佛事の知識は全くありませんので…これから教えてください」という類のことをよく言われます。僧侶の世界にはお経を理解するために勉強、研究する「教学」、お経を称える際の作法「^{ほっしき}法式」と言われるものがあり、前者は特に好きではありませんでしたが、京都本山の学校で2年間勉強しました。これらは僧侶の仕事の基礎となる「知識」です。先ほどの檀家さんの声を裏返しで考えてみますと、現在、私がお寺で営んでいる行事、法要、その他様々な運営等は、更にこれらに対する改善に対しても、「知識」よりも私の感じるままでとり行われている場合ははるかに多いことに気づきます。法要を営む何日か前から、これからたたえる神佛、先立つた方々の声を拾ってみることは大事だと思います。たくさん拾った時の法要ほど、帰られる参詣者のお顔はより清々しいことがわかります。

これから^{うら}盂蘭^{ぼんえ}盆会の季節を迎えます。スーパーで買ってきたものをそのままお供えするのではなく、今年はどうでしょう、亡き人のお声を受け止めながら、あなた自身の思いついたメニューで^{りょうぐぜん}お霊供膳をつくりお供えさしたらどうでしょう。その前にお寺へ行き、お^{せがき}施餓鬼のお経をあげてもらってからお供えすれば、なおさら良いです。 俊徳丸

